

令和7年1月7日

研修だより 57号



授業イメージの転換

小笠原康晃

「子どもが自ら学びだす「教えない授業」を創る（西留康雄、ぎょうせい、2023）」という本を読む機会をいただきました。

子どもたちが主体的に学ぶ授業は、本校の研修でも目指している授業です。本の中に、研修に繋がるキーワードがたくさんありましたので、御紹介します。

初めは、はい回ってもいい。

生活科が初めて導入されたとき、また、総合的な学習の時間が本格的に導入されたとき、「はい回る経験主義」「活動あって学びなし」という言葉が言われました。

活動ばかりしていて、子どもたちに学びが蓄積されていないのではないか、という批判から生まれた言葉です。

現行の学習指導要領に示されている「資質・能力」は、漢字の習得などとは異なり、すぐに習得できるものではありません。

しかし、一生涯に渡り、使うことができるものです。

本年度、4年生の実践では、いわゆる「はい回る場面」を多く取りました。

4月から5月はビオトープに毎週のようにいきました。2コマの時間を使って、ひたすら自由活動をしました。

理科の「電流のはたらき」の単元では、4時間程度、ひたすら理科のキットで遊びました。

結果、子どもたちは自分たちで取り組みたいことを決めたり、教科書の内容に繋がるような疑問を持ったりすることができました。

子どもたちの十分な体験活動が、「外来種のアメリカザリガニを何とかしたい」という切実感や「どうしてプロペラの向きが変わるのだろう」という疑問に繋がったと思います。

単元計画にメリハリを付けることで、主体的な学びに繋がると感じました。